

# 民衆史のパラドクス

## ——チアパスの「カスタ戦争」を事例として——

小原 正

1. はじめに
2. 清水の描く「カスタ戦争」
3. ジャン・ルスの描く「カスタ戦争」
4. 両者の比較から
5. おわりに

### 1.はじめに

以前には、歴史家は「国王たちの事跡」しか知ろうとしていないとって責められたものである。たしかに今日では、事態はそのようではない。歴史家たちは以前の歴史家であったら沈黙するか、敬遠するか、あるいは単に無視してすましていたようなことに、よりいっそう取り組んでいる<sup>1</sup>。

イタリアの歴史家、カルロ・ギンズブルグは16世紀イタリアのフリウリ地方に住んでいたあるひとりの粉屋の歴史を扱った著作、『チーズとうじ虫』をこのように始めているのだが、彼のこの言葉は、歴史学において30年ほど前から社会史や民衆史といった分野が何に関心を集中させてきたのかを、端的にあらわしてい

ると言えるだろう。つまり、かつて歴史学は、国家の興亡や外交関係、それぞれの時代の統治者がどのような事績を残したのかにもっぱら関心を集中させ、エリート層の歴史を記録してきた。それが現在では——もっともギンズブルグが言及していたのは30年前の現在なのだが——そのような統治者やエリート層の事績を中心とする歴史叙述ではほとんど触れられてこなかったもの、すなわち「民衆」とよばれる層に関心が集まるようになってきたのである。

しかしながら、これは単に民衆の生活や文化という題目に関心が集まるようになったということの意味しているわけではない。なぜなら、統治者やエリート層の事績を中心とする歴史叙述においては、単に題目として民衆の生活や文化が排除されてきただけでなく、民衆の視点、あるいは民衆の視点からの歴史認識が排除されてきたからである。そしてこのような文脈において、統治者やエリートの視点からではなく、民衆の視点から歴史をとらえなおすという作業が意味をもつのである。

では、民衆史を書こうとする試みにおいて、エリートの視点から書かれてきた歴史を民衆の視点からとらえなおそうとすると、どのよ

<sup>1</sup> カルロ・ギンズブルグ『チーズとうじ虫 16世紀の粉屋の世界像』、みすず書房、1984年、1ページ。

うな作業が必要であり、そこにはどのような問題が含まれているのか。本稿では、1860年代末にチアパスで起きた「カスタ戦争」を扱った清水透とジャン・ルスの二人の研究者の歴史叙述を比較することによって、民衆史を書こうとするさいに、どのような問題が横たわっているのかを明らかにしたい。

## 2. 清水の描く「カスタ戦争」

一般的には、「カスタ戦争」とは、ユカタン半島で起こったマヤ系先住民の反乱(1847—1901)を指す名称として知られている。だが、本稿で扱う「カスタ戦争」は、このユカタン半島で同時代に起きていた「カスタ戦争」の影響を強く受けてそのように呼ばれるようになった、19世紀のチアパス州で起きたマヤ系インディオの反乱である。本稿では、まず清水透の『エル・チチョンの怒り——メキシコにおける近代とアイデンティティ』<sup>2</sup>における「カスタ戦争」に関する叙述を紹介することで、この「カスタ戦争」に関する導入を行うとともに、後にジャン・ルスの叙述と比較するために布石しておくことにする。

清水は、1980年代初頭からチアパスの中央高地にあるインディオ共同体チャムーラでフィールドワークを行ってきた歴史研究者で、その著作『エル・チチョンの怒り』では、「彼ら[イ

ンディオ]の感覚で捉えられた過去、そこには事実とは異なる untrueな部分がいくらでもあるが、過去の事実を重視してきた歴史学の立場にこだわれば、その「過去」は false であり、したがって過去をそのように捉える彼らの価値の世界そのものは、歴史学の対象から排除されてしまう。しかし、その世界を抜きにして、インディオ社会の歴史、メキシコの歴史は描けるのであろうか」<sup>3</sup>との問題提起を行い、インディオの証言にもとづいた、インディオの視点からみたメキシコの現代史を書くことを試みている。

もちろん、この著作における清水の「カスタ戦争」に関する叙述では、「カスタ戦争」が1860年代末に起きた出来事であるという性格上、もちろんインディオ自身の証言にもとづいてはおらず、また清水自身インディオの視点からという彼の本来のスタンスをこの部分ではとっていない。しかしながら、インディオたちの歴史への主体的な関わりに注目しようとするこの清水の著作では、インディオがラディーノに対してどのように反乱を起こしたのか、という点が特に強調されるような形で叙述がなされている。それではさっそく、清水の描きだす「カスタ戦争」をみていくことにしよう。

清水によれば、1869年6月21日、「婦女子も含む全人口一万人たらずのサン・クリストバル

<sup>2</sup> 清水透『エル・チチョンの怒り』、東大出版会、1988年(以下、本稿ではこの著作を清水(1988)と略記)、pp. 20—55。

<sup>3</sup> 清水(1988)、p. 222。

の町は、山刀と斧で武装したチャムーラを中心とする5000人のインディオの群に包囲されており、この「チャムーラの反乱は、すでにツォツィル語系の他の集団にも飛び火し、さらにツェルタル語系の地域にも波及しつつあった」という。そして、「圧倒的な「野蛮」とおいつめられた「文明」、喰うか喰われるかのその両者の対決は、1712年のツェルタル系インディオの大反乱以来、サン・クリストバルの町を支配してきた157年にわたる「平和」の終焉であり、「文明」の最大の危機をも意味した」<sup>4</sup>。

この経緯を説明するなら、1867年12月22日の白昼、インディオ共同体チャムーラの一部落ツァハルヘメルで、あるインディオの娘アグステイーナの足元に黒い石が3つ、空から降ってきたことからすべては始まる。娘がその黒い石を持ち帰り祭壇に祭ると、人びとの間に神のお告げだという噂が急速に広まり、ツァハルヘメルは、チャムーラだけでなく周辺の村々帯における巡礼の地へと変わっていく。年が明けると、この新宗教はチャムーラの村役クスカットを指導者として、ますます広まっていき、8月のサンタ・ロサの祭りのころには、各村の教会や市が人びとから見離され、またラディーノによって定められた行政区も完全に無視されるほどまでに、ツァハルヘメルは地域の社会、宗教、経済的な中心地へと変化を遂げる<sup>5</sup>。

この間、サン・クリストバルの行政官は軍を派遣して一度クスカットを捕らえているのであるが、サン・クリストバルの保守派と新興の町々のリベラル派との対立を背景に、州政府はこのチャムーラの指導者を、即刻釈放してしまう。しかし12月2日、ついに行政官は再び軍隊を派遣し、礼拝堂を破壊しアグステイーナと指導者のクスカットを捕える<sup>6</sup>。

「しかし、「語る偶像」はすでに、しっかりと村人の心をとらえていた。そして翌69年の復活祭の金曜日、ツァハルヘメルの十字架は、聖なる血で染まることとなる。指導者を奪われた村人たちは、「神の母」アグステイーナの弟（10または11歳）を十字架にかけ、救世主の出現をまったのである」<sup>7</sup>。

それから数ヶ月もたたないうちに、救世主は現れた。村人たちの待ち望んでいた救世主は、五月中頃に妻と弟子一人を連れて村に到着し、集まった村人に呼びかける。「私はこの州の市民<sup>8</sup>ではない。そなたたちに手を貸すため、ただそれのみのため、長く苦しい旅を続けてきた。……州内の土地、そして州の外にある土地も全てそなたたちのものだ。私の命ずる全てに従ってくれるなら、そなたたちがこの世の全ての主となれるよう、私はここにとどまることにする」。このように述べた彼は、メキシコ市に

4 清水 (1988), pp. 21-23.

5 清水 (1988), pp. 23-26.

6 清水 (1988), pp. 24-25.

7 清水 (1988), p. 26.

8 清水によれば、特権を与えられた町の住人を指す。

生まれ、当時はサン・クリストバルに住むラディーノの教師イグナシオ・ガリンドであった。彼はさっそく村人をいくつかの隊に分け、その内の一人を総指揮官に任命し、軍事訓練を開始した。サン・クリストバルでは一気に不安が高まるが、州知事は事態の深刻さに目をつぶり、なおも援軍を派遣しない。そして「ついに、事態はラディーノに対する殺戮へと発展したのである」<sup>9</sup>。

「救世主ガリンドの出現からおよそ1ヶ月、6月12日の白昼であった。ガリンドは、偶像一体を持ち去ったチャムーラ教区の司祭3名を千人以上の群衆で包囲し、町へ逃れようとする彼ら全員を殺害する」。さらに、その翌日から3日間にわたり、ラディーノが所有する村々の農園を襲撃し、奴隷状態にあった何千人ものインディオを解放した。「襲撃・焼き討ちにあった農園は10を超え、殺されたラディーノは、チャルチウイタン村の教区司祭や小学校教師を含め成人男女79人、子供の犠牲者も20人を上まわった。そして17日には、農園から解放されたインディオを軍勢に加え、ガリンドはクスカットの救出にサン・クリストバルへと向かった」<sup>10</sup>。

7000人のインディオに対して、それを迎え撃つサン・クリストバルの兵力は90名の武装兵士と100人たらずの市民、そして州政府が派遣

した軍司令官と30名の兵士であった。「圧倒的に反乱側に有利な状況のもとで、軍司令官はガリンドに交渉を求め、クスカットとアグステイーナの釈放を迫るガリンドに対し、司令官は2人の釈放に同意する。しかしそれには条件があった。ガリンド本人と妻、そしてガリンドの弟子の3人は、3日間に限り人質とならねばならなかったのである。そのような条件をなぜ飲んだのか、理由は知る由もない」<sup>11</sup>。

いずれにせよ、インディオたちは夜になると包囲を解き、釈放されたアグステイーナと指導者クスカットを先頭に村へ帰っていった。しかし、約束の3日後になってもガリンドは戻ってこず、クスカットは翌21日、5000人のインディオを率いてサン・クリストバルを攻撃する。夜になると戦いは中断し、政府側の死者100人近く、インディオの死者も40人以上になったが、インディオたちはなおもガリンドの釈放を確信し村へ帰っていった<sup>12</sup>。

しかし州知事みずから3000の軍勢を従えてサン・クリストバルに到着し、事態は一変する。ガリンドと弟子の2名は処刑され、6月30日、政府軍は反撃にでる。戦況は逆転し、7月3日、ついにツァハルヘルは廃墟と化す。クスカットはそれ以降も一年近くにわたり、およそ800人のインディオを指導して、サン・ファン北およそ15キロのシシムと呼ばれる部落を拠点

<sup>9</sup> 清水 (1988), pp. 26-28.  
<sup>10</sup> 清水 (1988), p. 29.

<sup>11</sup> 清水 (1988), pp. 29-30.  
<sup>12</sup> 清水 (1988), p. 30.

に抵抗をつづけるが、ついに1870年7月27日、シシムも政府軍の手に落ち、戦闘は終了する。クスカットは翌年、隠れ家の洞窟で死体となって発見されるが、アグスティーナは行方不明のままとなった<sup>13</sup>。

### 3. ジャン・ルスの描く「カスタ戦争」

以上、清水の描きだす「カスタ戦争」をみてきたわけであるが、しかしながら同じく「カスタ戦争」を扱ったジャン・ルスの論考「誰のカスタ戦争か？」<sup>14</sup>を読むと、ここでルスが描きだす「カスタ戦争」が清水の描きだすそれとはまったく別のものであることに気づく。清水は、このチャムーラの「反乱」が鎮圧されてから約20年後にサン・クリストバルのエリート、ピセンテ・ピネーダによって書かれた歴史書『チアパス州で起きた先住民の蜂起の歴史』<sup>15</sup>——ルスによればこの著作は現在インディオの教師たちが歴史を教える際に参考とするほどまでに古典となっている——、そしてクリストバ

ル・モリーナによって書かれた回想記「カスタ戦争——ある目撃者によって語られたチアパスにおけるインディオの蜂起、1867-70年」<sup>16</sup>の二つの著作にその叙述のほとんどを依拠しているのだが、ルスはこのような19世紀のラディーノのジャーナリストや歴史家から継承された「カスタ戦争」の歴史を検証するために、当時の新聞、裁判記録などの行政文書、州政府軍の兵士によって書かれた日記、インディオが「反乱」を起こした地域の教区司祭が書いた書簡などの資料を用いているのである。

ここでは、清水とルスの描きだす二つの「カスタ戦争」の大きく異なる点をいくつか確認していくことにしよう。

まず、清水の記述によれば、クスカットとアグスティーナがラディーノによって逮捕された後に、救世主を待望するインディオたちが、アグスティーナの弟を十字架にかけ、ツァハルヘメルを十字架を聖なる血で染めたという<sup>17</sup>。

しかしルスによるなら、これについては「1868年から1871年の間に発行された新聞の

13 清水 (1988), p. 30, pp. 52-53.

14 Jan Rus, "Whose Caste War?: Indians, Ladinos, and the Chiapas 'Caste War' of 1869," in Kevin Gosner and Arif Ouweneel (eds.), *Indigenous Revolts in Chiapas and the Andean Highlands*, Centro de Estudios y Documentación Latinoamericana (CEDLA), 1996, pp. 43-77. ただしこの論考はもともと M. J. MacLeod and R. Wasserstrom (eds.), *Spaniards and Indians in Southeastern Mesoamerica: Essays on the History of Ethnic Relations* (University of Nebraska Press, 1983) に発表されたものの改訂版である (以下、本稿ではこの論考を Rus (1996 [1983]) と略記)。

15 Vicente Pineda, *Historia de las sublevaciones indígenas habidas en el estado de Chiapas* は1888年にチアパス州政府によって出版された著作なのであるが、本稿では Vicente Pineda, *Sublevaciones Indígenas en Chiapas*, Gramática y diccionario tzel-tal, Instituto Nacional Indigenista, に採録されたものを参照した。

16 Crisobal Molina, *War of the Castes: Indian Uprisings in Chiapas, 1867-70, as Told by an Eyewitness*, translated by Ernest Noyes and Dolores Morgadanes, Department of Middle American Research, Tulane University of Louisiana, 1934. この資料はサン・クリストバルのとある住人からフランス・フロム (Frans Blom) が購入したスペイン領原稿の英訳版であり、現在はアメリカ合衆国、ニュー・オーリンズにあるレイジアナ・チュレイン大学、中米研究科図書館に保管されている。この資料は「カスタ戦争」が起きたのと同時代に生きていたと思われる筆者によって書かれた回想記であるが、その筆者のクリストバル・モリーナが誰であるのかについては、まったく不明であるとされる (p. 361)。

17 清水 (1988), p. 26.

もっとも悪意に満ちた、人種主義的な記事のいずれにおいても触れられておらず——インディオの残酷さと非人間性を強調するための格好の題材だったはずなのだが——、この十字架の話は 19 世紀のエリート層による創作であると考えたほうが妥当なのである<sup>18</sup>。

次に、サン・クリストバルの教師でラディーノのイグナシオ・ガリンドの行動についてであるが、清水によるなら、彼は救世主としてインディオたちから迎えられ、彼らに軍事訓練を施し、「カスタ戦争」を指揮したことになっている<sup>19</sup>。

しかしルスによれば、ガリンドのこれら一連の行動については憶測の域を出ない。清水が描いたのは当時のサン・クリストバルで一般に信じられていたところのガリンド像なのであるが、ルスが後の裁判におけるガリンド自身の証言に依拠しつつ推測したところによるなら、彼の意図はインディオに軍事訓練を施し「カスタ戦争」を指導するどころか、インディオとラディーノの間の流血を避けることにあったのである。インディオに彼らが持つ権利を教え、ラディーノがインディオの村を襲撃しようとしていることを彼らに知らせようとしただけだったのである<sup>20</sup>。またチャムーラ教区司祭を含む3名のラディーノの殺害を指揮したことにつ

いてガリンドは、後の裁判で、殺害の現場にはいたが、彼はインディオたちを止めようとしていたと証言している<sup>21</sup>。

さらに清水の記述によれば、ガリンドがクスカット救出のために 7000 人のインディオを率いてサン・クリストバルへ向かったさい、サン・クリストバルの軍司令官は、ガリンド本人とその妻、そしてガリンドの弟子の3人を人質にとるという条件でクスカットとアグスティーナの釈放を提案する。ガリンドはこの条件に同意するのだが、圧倒的に反乱側に有利な状況のもとで、「そのような条件をなぜ飲んだのか、理由は知る由もない」<sup>22</sup>。

しかし、ルスによれば、そのような条件でのクスカットとアグスティーナの釈放を提案したのはガリンドのほうであり、しかも3日間の人質ではなく、インディオたちが攻撃をせすに町から引き上げるまでの一時的な人質になると申し出たのであった。それにしても、なぜガリンドはみずからこのような提案をしたのか。ガリンドを「カスタ戦争」を指揮する「将軍」として考える者たちにとって、彼のこの行為は理解に苦しむものであろう。しかしながら、ルスによれば、ガリンドは彼自身何ひとつ悪いことをしていないと考えていたからこそ、ラディーノに対してわが身を委ねることができたのである。クスカットらの不当な逮捕に憤るイン

18 Rus (1996[1983]), p. 70

19 清水 (1988), pp. 26-29.

20 Rus (1996[1983]), p. 62.

21 Rus (1996[1983]), p. 75.

22 清水 (1988), pp. 29-30.

ディオたちと、「カスタ戦争」の恐怖にとらわれたラディーノたちの仲裁役を買ってでること、実際に彼はこの二つの勢力の全面衝突を回避させ、インディオとラディーノの双方にとって有益な提案をしてみせていたのである。

「事実、クスカットらが無事インディオたちに引き渡された後、ガリンドは他のラディーノたちに対して恐怖を抱いているような様子をまったく示さなかったばかりか、実際に『何事もなかったかのように彼の家に向かって歩き出した！』のである」<sup>23</sup>——もちろん、まったく異なる仕方でも事態を認識していたサン・クリストバルのリーダーたちは、インディオたちが引き上げるやいなや合意を破棄し、「カスタ戦争」をたくらむインディオたちの「将軍」ガリンドを逮捕したのであるが<sup>24</sup>。

最後に、そしてルスの論考におけるもっとも重要な論点でもあるのだが、果たしてインディオたちはラディーノに対して「カスタ戦争」を仕掛けたのであろうか。清水によれば、「サン・クリストバルの町は、山刀と斧で武装した5000人のインディオの群に包囲され」<sup>25</sup>、6月21日、ガリンドが釈放されないことを理由にクスカットは「5000人のインディオを率いてサン・クリストバルを攻撃した」<sup>26</sup>のである。

しかしながら、ルスによれば答えは否である。

1869年6月17日、ガリンドは数千人のインディオを率いてサン・クリストバルを訪れ、クスカットの釈放を要求する。「このインディオによる「包囲」がサン・クリストバルの市民たちに引き起こした恐怖とは対照的に、インディオたちの行動は、今にも攻撃を始めようとしている軍隊が起すようなものではなかった。彼らは白旗を掲げていただけではなく、戦闘が困難な夕暮れの暗がりのなか、サン・クリストバルに現れたのである」<sup>27</sup>。そして述べたように、ガリンドは自身とその妻と弟子の3人が一時的な人質となる条件でクスカットの釈放を提案し、戦闘を避けたのであった<sup>28</sup>。

さらに、クスカットが釈放された後の6月17日から21日の間、インディオたちはサン・クリストバルを包囲し、攻撃するどころか、ツァハルヘメルでクスカットの帰還を祝っていた。ただ、彼らはラディーノからの報復に備えて、600人ほどを見張りとしてサン・クリストバルへと続く道に留まらせておいただけなのである<sup>29</sup>。

また清水によれば、インディオによる「包囲」がつづき、クスカットに率いられたインディオがサン・クリストバルを攻撃したという6月21日の「戦闘」の様子は、ルスによってまったく別様に描きだされている。

23 Rus (1996[1983]), p. 64.

24 Rus (1996[1983]), pp. 63-64.

25 清水 (1988), pp. 21-22.

26 清水 (1988), p. 30.

27 Rus (1996[1983]), p. 63.

28 Rus (1996[1983]), pp. 63-64.

29 Rus (1996[1983]), p. 64.

ルスによれば、およそ一週間のあいだ何ら攻撃的な行為をとらず、サン・クリストバル周辺で見張りをつづけていたインディオたちに対して、6月21日、州政府軍は攻撃を始める。同日午後サン・クリストバルに到着したばかりの重装備をほこる300名の州政府軍が、同市の北と西にキャンプを張っていたインディオたちを襲撃し、夕暮れまでに300人以上ものインディオを殺害することに成功したのである。つまりこの日、攻撃を行ったのはインディオではなく、州政府軍だったのである<sup>30</sup>。

このあと、州政府軍は6月30日からインディオ部落への攻撃を本格的に開始し、7月27日まで断続的にインディオとの「戦闘」を続けるが、結果は州政府軍の圧倒的な勝利に終わる<sup>31</sup>。しかし、例えばこのインディオとの6月30日の「戦闘」についても、ルスが引用するある政府軍兵士によるこの「戦闘」の描写は、次のようなものである。

我われが最初にチャムーラの村人たちの偵察に行ったとき、村人のうちの数百人ほどが山の斜面に混乱した様子で群れをなし、まばらな集団をつくっていた。そして我われのライフル銃の射程距離に完全に入る前に、女や子供だけでなく男たちも、むきだしの膝を地面につけて許しを乞お

うとしていたのだった。彼らが服従を示すためにとった謙虚な姿勢にもかかわらず、政府軍は前進をつづけ、村人たちはひざまずいたまま動かなかった。村人たちは、彼らが悲痛の涙を流しながら乞うている慈悲があたえられるものと期待していたことは間違いない。兵士たちは、200メートルよりも少し近づいたところで、村人の密集した群れに向かって撃ちはじめ、その銃弾によって村人たちになされた大虐殺にもかかわらず、彼らの慈悲をもとめる叫びにもかかわらず、兵士たちはしばらくの間銃を撃ちつづけたのであった<sup>32</sup>。

つまり、インディオたちは戦っていないのである。

#### 4. 両者の比較から

このようにみえてくると、清水の描きだす「カスタ戦争」とルスの描きだす「カスタ戦争」がいかに異なるものであるかがわかるだろう。

すなわち、ジャン・ルスによれば、1860年代末のチアパスで生じていた事態というのは、少なくともインディオにとっては「カスタ戦争」ではなかった。「カスタ戦争」はむしろラディーノの側から一方的に戦われ、インディオは大量殺戮の遂行者であるどころか、逆にその犠牲

30 Rus (1996[1983]), p. 65.

31 Rus (1996[1983]), pp. 65-66.

32 Rus (1996[1983]), p. 65.



者だったのである。もちろん清水も、当時のサン・クリストバルのエリート層の間で支配的であった「カスタ戦争」という認識をその歴史叙述において採用してはいない。しかし清水によれば、この1860年代末の出来事は「チャムーラの反乱」だったのであり、インディオとラディーノ、「喰うか喰われるかのその両者の対決は、1712年のツェルタル系インディオの大反乱以来、サン・クリストバルの町を支配してきた157年にわたる「平和」の終焉であり、「文明」の最大の危機をも意味した」のである。さらに、たとえばルスの叙述では、見張りとしてサン・クリストバル周辺の道路に600人ほどのインディオを留まらせておいたと認識されている事態が、清水の叙述では、インディオによるサン・クリストバルの「包囲」と認識されているのである。

では、なぜ清水とルスの叙述の間にこのような認識の違いが生じたのだろうか。もちろん清水がサン・クリストバルのエリートであるピネーダの歴史書に依拠しているのに対し、ルスは新聞、日記、行政記録などに依拠しているという資料の性格の違いがこのような認識の違いに大きく影響していることは間違いなさだろう。しかし、ではなぜこの二人がこのような資料の選択を行ったのかという疑問と、彼らが「カスタ戦争」の叙述を行うさいに持っていた問題意識をつなぎ合わせて考えると、次のような結論にたどりつく。

まずは清水の場合であるが、清水がその著作『エル・チチョンの怒り』全体を通して描こうと意図しているのは、「外部世界とのせめぎあいの過程で自己の現代化をはかる」<sup>33</sup>インディオの主体性、言い換えれば、「征服以降今日にいたる近代化の歴史のなかで、その「近代」＝「外部世界」との攻めぎあいをつうじて、主体的に自己再編をとげつつアイデンティティの存続を追及してゆくあり方、すなわち、「近代」への「村」の主体的対応のありよう」<sup>34</sup>なのである。

このような意図から清水は、1860年代末のチアバスでインディオたちがラディーノの支配に対していかに反乱を起こしたのかを描くと同時に、この反乱を、19世紀初頭の独立以降のラディーノによる共同体の土地の剥奪や、1850年代以降の自由主義派の台頭によって植民地時代からの支配層エリートや教会の権威が失墜していく一連の歴史的過程のなかに位置づけ<sup>35</sup>、結論としてはこの反乱を、「近代化の波が村々を襲い植民地的秩序が揺らぎはじめたとき、インディオは、行政村、教区、信徒団、農園といった外圧による分断や再編によって定められた境界とは関わりなく、「大地のへそ」を中心に新たな統合を目指した」と解釈するのである。さらに清水は、チアバスに限らず 19

33 清水 (1988), p. 40.

34 清水 (1988), p. 215.

35 清水 (1988), pp. 42-52.

## 242 民衆史のパラドクス

世紀後半にメキシコで起こった数多くの反乱について、「個々のケースにより反乱の条件も展開の過程も微妙に異なるとはいえ、基本的には近代化の建設に対するインディオの反応であり、支配社会にとって、19世紀後半はまさに「野蛮」の轟きの時代であった」との一般化を行い、ここにおいて清水は、独立以降の近代国家建設という時代の変化のなかでインディオたちがいかに主体的な対応を行っていたのかを強調する<sup>36</sup>。もちろんここには、インディオたちを「たんなる「敗者の歴史」「未開社会の歴史」に押し込み、彼らの主体的な歴史への関わりを正当に認識しえない」従来の歴史叙述のあり方に対する清水の批判がこめられていると言えるだろう。

しかしながら、インディオの主体性を積極的に歴史叙述のなかに取り入れようとして清水が依拠した資料は、皮肉なことに、19世紀のサン・クリストバルのエリートによって書かれた歴史書であり、本稿でルスの論考と照らし合わせてみてきたように、清水の歴史叙述は、当時のサン・クリストバルのエリートが行った歴史認識を色濃く反映しているのである。言い換えるなら、清水によるインディオの主体性を強調する歴史叙述は、いかにインディオがラディーノに対して反乱を起こしたのかを積極的に取り上げ力強く描こうとする点において、19世紀

のチアバスのエリートが書いたインディオの「野蛮さ」を強調する歴史叙述と、皮肉にも一致するのである。そしてこの一致が、本来はインディオの視点からの歴史を描こうとする清水をして、エリートの書いた歴史書を資料として選ばせ、その歴史叙述のなかに当時のサン・クリストバルのエリートの視点からみた歴史を紛れ込ませてしまう。例えば、ルスによればピネーダの創作とされる、インディオたちによるアグスティーナの弟の十字架への貼り付けの挿話が、清水の叙述ではインディオの反乱の物語における劇的な一場面として採用されてしまうというように。

しかしながら他方、ルスの歴史叙述にも問題がないわけではない。ここでまず確認しておきたいのは、この論考におけるルスの意図は、19世紀のチアバスのエリートの歴史認識が再生産する「野蛮な」インディオというイメージを相対化することにある、ということである。実際、清水に限らず、多くの研究者が「カスタ戦争」を叙述するさいに参照してきたピセンテ・ピネーダ(1888)の叙述では、「善良な」「文明化された」ラディーノに対してインディオがいかに「残虐で」「野蛮な」戦いをしかけ、それに対してサン・クリストバルのラディーノはいかに勇敢に戦い、この危機をくぐりぬけたのか強調されている。もちろんルスは、このような「野蛮な」インディオという当時のエリートの価値観をも、この資料を参照してきた研究者

36 清水(1988), pp. 53-55.

たちが引き継いでいるとは言っていない。しかしながら、ルスによれば、「近年、人類学者や他の研究者が、インディオの側の物語を語るという目的を明言しつつ、これ[1869年の「カスタ戦争」]について熱心に研究してきたにもかかわらず、この出来事の細部の信憑性や、インディオのラディーノに対する憎悪がインディオ独自の宗教を介して「カスタ戦争」を引き起こすエネルギーへと変わっていったという全体的な印象を検証してきた研究者はひとりもない<sup>37)</sup>のである。

このような意図からルスは、新聞、日記、行政記録などの、出来事とほぼ同時進行的に書かれた一次資料から厳密に「カスタ戦争」の歴史を再構成し、19世紀のエリートの歴史認識を検証する。このようにしてルスの叙述では、インディオによるアグスティーナの弟の十字架への貼り付けはピネーダの著作にしか言及されていないことからピネーダによるインディオの「野蛮さ」を誇張するための創作と推測され、さらにガリンドはインディオたちを「カスタ戦争」へと指揮するどころか、インディオとラディーノの仲介役を買ってでることで双方の軍事的な衝突を避けたとして言及される。また、全体的な「カスタ戦争」像についても、インディオは「カスタ戦争」を戦わなかったと解釈するのである。

しかしながら、ではインディオたちはまったく何もせず、エリートの支配にまったく服従したままだったのかというと、そうではない。「反乱」という言葉が適切かどうかは別としても、清水が嚙んでいるように、ツァハルヘルで行われたサンタ・ロサの祭りでは、白人の司祭ではなく、インディオのクスカットが洗礼を施すようになり、また各村の市や教会は見離され、行政区も無視されたのである。またルスの記述によれば、1868年の4月には、サン・クリストバルにおけるカトリックの宗教行事や市場からインディオの姿がほとんど消え、さらに、1869年7月15日から16日にかけては、チャムーラの南にあるいくつかの村で16人のラディーノが殺され、またチャルチウイタン村では教区司祭、小学校教師とその家族がインディオの集団によって殺されたのである。この間、インディオに捕まってから無傷で解放されたラディーノもいることから、インディオがラディーノに対する無差別的な虐殺、つまり「カスタ戦争」を仕掛けたのではなく、何らかの形でインディオを脅したラディーノや、積年の恨みがあるラディーノに対してのみインディオたちの怒りが向けられたのだとルスは説明するが、では、なぜこのときにインディオたちの怒りが爆発したのかについて、ルスは何ら説得力のある説明を提供しえていない<sup>38)</sup>。つまり、このよう

37 Rus, p. 44.

38 Rus (1996[1983]), p. 63

な行為にでたインディオたちの直接的な動機が何であったのかは不明であるとしても、この「カスタ戦争」のいくつかのプロセスにおいて、インディオたちはエリート層の支配に対して何らかの抵抗／反抗を試みたことは確かなのである。

このように、ルスによるインディオの「野蛮さ」の言説を相対化しようとする歴史叙述は、いかにインディオが「カスタ戦争」を戦わなかったのかを強調するあまり、インディオが行った反抗・抵抗の諸契機をも同時に相対化してしまい、今度はインディオの歴史への主体的な関わりを過小評価してしまうという危険性を抱えているのである。

すなわち、清水の歴史叙述が、インディオの反乱の中にインディオの主体性を見いだそうとするがゆえに、「インディオの反乱」というエリートの歴史認識を採用してしまう一方で、ルスの歴史叙述は、エリートの歴史認識によって作り出された「野蛮な」インディオというイメージを相対化しようとするがゆえに、インディオが行った反抗・抵抗の諸契機をも同時に相対化してしまう危険性をひめているのである。

このようにみえてくると、清水とルスの描き出す二つの「カスタ戦争」の違いが、単にその依拠する資料の性格の違いに起因するのではなく、この2人の研究者の問題意識の違いに由来していることが理解できるだろう。そしてこの問題意識の違いが、2人の資料選択に影響し、

それがついには「カスタ戦争」全体の認識の違いにまでつながるのである。しかしながら、見てきたように、この二つの歴史叙述のいずれもが、インディオに注目した歴史叙述を試みつつも、インディオの視点とインディオの主体性の両方を十分に反映させることには、失敗してしまっている。そしてこれが、民衆史を書こうとするさいの、ひとつのパラドクスなのである。

## 5. おわりに

本稿では「カスタ戦争」を扱った清水とルスの二つの歴史叙述を比較することによって、民衆史を描こうとする際に、民衆の視点から歴史をとらえなおすという作業がいかに困難であるのかを示してきた。具体的には、インディオの主体性を強調しようとする清水の歴史叙述がエリートの歴史認識に依拠してしまうことと、エリートの歴史認識によって生み出されてきた「野蛮な」インディオというイメージを相対化しようとするルスの歴史叙述が、今度は逆にインディオの主体性を過小評価してしまっていることを指摘してきた<sup>39</sup>。

しかし、ではこのようなパラドクスに陥らず

39 米国の歴史研究者ベンジャミンは、チアパスの政治史を扱った著作の中で、エリートの動向のみを取り上げ、インディオの主体性を認めていない。Thomas Benjamin, *A Rich Land, A Poor People: Politics and Society in Modern Chiapas*, rev. ed., University of New Mexico Press, 1996 [1989] カスタ戦争についてのベンジャミンの叙述がルスの研究に依拠している点は興味深い。

に、民衆の視点と民衆の主体性の双方を十分に  
取り入れた歴史叙述を行うには、どのような仕  
方で史料を選択・解釈し、どのような仕方で歴  
史と向き合えばよいのだろうか。もちろん、私  
はこのパラドクスが不可避的なものであると  
は考えていない。むしろ、これを課題として受  
け止めることで、民衆史の可能性が広がるの  
ではないだろうか。

(おばら ただし・メキシコ大学院大学 研究生)

# Quadrante

クアドランテ [ 四分儀 ]

地域・文化・位置のための総合雑誌

特集1：記憶と歴史Ⅳ シンポジウム記録「ピエール・ノラ編『記憶の場』をどう読むか—日本語版の投げかけるもの—

まえがき

工藤光一

基調報告：『記憶の場』の彼方に—日本語版をどう読むか—

谷川稔

コメント

安丸良夫 牧原憲夫 岩崎稔

翻訳者からの応答

渡辺和行 江川温 長井伸仁

討論

特集2：西洋史学会シンポジウム「グローバル化とヨーロッパ史の可能性」

問題提起

増谷英樹

グローバル化、西洋化、ヨーロッパの規範化—カトリック王国(1580-1640)と「接続された歴史」—

セルジュ・グリュジンスキ

「近代ヨーロッパ」に歴史はあるか

マーク・マゾーア

世界史におけるヨーロッパ史の位置

西川正雄

コメント

小谷汪之

討論

争点

はじめに

岩崎稔

討論：「日常的ファシズム」論のさらなる一歩のために

(討論者：林志弦 高/鄭甲熙 金東椿 金鎮虎 金哲 朴煥珉)

崔真碩 訳

「日常的ファシズム」の読み直し

林志弦

論文

19世紀後半のウィーンの流入民と同化の問題—チェコ人とユダヤ教徒の比較—  
殺された少女とその家族の表象

増谷英樹

—メアリー・フェイガン殺害事件とレオ・フランクのリンチ事件再考(1913年—1915年)—  
ヒューマニズムの争奪戦：新自由主義の起源と射程の考察

佐々木孝弘

中山智香子

研究ノート

民衆史のパラドクス—チアパスの「カスタ戦争」を事例として—

小原正

書評論文

(日本批判)はいかにして(日本)を離脱するか(酒井直樹『過去の声』)

澤井啓一

社会批判としての思想史(酒井直樹『過去の声』)

葛西弘隆

「あいまいさ」をいかに抱きしめるか(J. ダワー『敗北を抱きしめて』)

戸邊秀明

十八世紀ドイツ語純化論の成立とその社会的意義(J. H. カンベほか)

吉田耕太郎

統制の政治学—通信政策研究の視点から(奥村喜和男『通信論叢』)

板橋祐己

文献紹介

アレクサンダー・ハース「忘れられた農民党—シュタイアーマルク農村同盟とオーストリア政治(1918-1934)への影響」

藤井欣子

# Quadrante

Areas, Cultures and Positions

## Feature 1: Memory and History IV

"How Should We Read the Japanese Version of Pierre Nora (ed.), *Les lieux de mémoire*?"

Introduction

KUDO Koichi

Main Speech: Beyond *Les lieux de mémoire*

TANIGAWA Minoru

Comments

YASUMARU Yoshio, MAKIHARA Norio, IWASAKI Minoru

Responses to Comments

WATANABE Kazuyuki, EGAWA Atsushi, NAGAI Nobuhito

Discussion

## Feature 2: JCOH Symposium "Globalization and Rewriting History of Europe"

Proposal

MASUTANI Hideki

Catholic Monarchy, Occidentalization, Globalization, and Cultural Mixtures

Serge GRUZINSKI

Does Modern Europe Have a History?

Mark MAZOWER

European History Located in World History

NISHIKAWA Masao

Comments

KOTANI Hiroyuki

Discussion

## Focus

Forward

IWASAKI Minoru

Discussion: Rethinking Thesis "Fascism of Everyday Life"

(Discussants: LIM Jihyeon, KO/JEONG Gaphee, KIM Dongchun, KIM Chul, PARK Hwanmu)

Translation: CHOI Jinseok

How to Deepen the Thesis "Fascism of Everyday Life"

LIM Jihyeon

## Articles

Immigration and the Problem of Assimilation in Wien in the late 19<sup>th</sup> Century

MASUTANI Hideki

Representations of a Murdered Girl: The Murder of Mary Phagan and the Lynching of Leo Frank Reconsidered, 1913-1915

SASAKI Takahiro

Struggle for Humanity: An Investigation of the Rise and Range of Neo-liberalism

NAKAYAMA Chikako

## Notes and Suggestions

A Paradox in Writing the History of the Common People: A Case of the Caste War in Chipas, Mexico

OBARA Tadashi

## Book Review

How Does "Japan Criticism" Secede from "Japan"?

-The Impression of Naoki SAKAI, *Kako no Koe (Voices of the Past)*, Ibunsha, 2002

SAWAI Keiichi

Intellectual History as Social Intervention: On Naoki SAKAI's *Voices of the Past*

KASAI Hirotaaka

Embracing Ambiguities?: J. W. Dower's *Embracing Defeat* and the Shadow of "Postwar Japan-US Relations"

TOBE Hideaki

Publicity and Homogeneity -The Ambiguity of Joachim Heinrich Campe's Language Purism

YOSHIDA Kohtarō

Control and Bureaucracy: From the Perspective of Telecommunication Policy

ITABASHI Yuuki

## Recent Publications

Alexander Haas, *Die vergessene Bauernpartei:*

*Der Steirische Landbund und sein Einfluß auf die österreichische Politik 1918-1934*

FUJII Yoshiko

Institute of Foreign Affairs

Tokyo University of Foreign Studies

No.5. March 2003

## 執筆者一覧

工藤光一  
谷川 稔  
安丸良夫  
牧原憲夫  
岩崎 稔  
渡辺和行  
長井伸仁  
江川 温  
増谷英樹  
セルジュ・グリュジンスキ  
マーク・マゾーア  
西川正雄  
小谷汪之  
林 志弦  
崔 真碩  
佐々木孝弘  
中山智香子  
小原 正  
澤井啓一  
葛西弘隆  
戸邊秀明  
吉田耕太郎  
板橋祐己  
藤井欣子

東京外国語大学  
京都大学  
  
東京経済大学  
東京外国語大学  
奈良女子大学  
徳島大学  
大阪大学  
東京外国語大学  
フランス国立科学研究センター  
ロンドン大学パークベク・カレッジ  
専修大学  
東京都立大学  
漢陽大学  
延世大学大学院  
東京外国語大学  
東京外国語大学  
メキシコ大学院大学研究生  
恵泉女学園大学  
津田塾大学  
早稲田大学  
東京外国語大学大学院  
東京外国語大学大学院  
東京外国語大学大学院

### 編集後記

『クアドランテ』第五号をようやくお届けする。しかし、その思うところは複雑である。わたしたちは、戦後世代として、戦争の死者たちのあとから来た人間に許された生を、またかれらに負託された生を営んできつつもりでいた。ところが、気がつくともうひとつの「戦時下」の人間になっていたのだ。イラク戦争開戦にいたるアメリカの理不尽、追従する日本政府の矮小さ、戦闘がもたらす惨たらしい犠牲と、それを正義と言いくるめて恥じない言論。いったいどこに倫理があり、どこに道理があるのか。《記憶と歴史》という主題を設定し、戦争の記憶に向き合い、歴史叙述の臨界点をつねに問いかけてきた本研究所の営みであったからこそ、その営みをまとめるにあたって、この愚かしい時代のなかでは、はたしてわたしたちもいつのまにか残忍な蛮行の加担者となっているのではないか、わたしたちの営みは研究という名の自己満足ではないのかと自省せざるをえない。

思いは千々に乱れる毎日である。おさまりのよい編集後記など書けるものではない。本誌もそうした時代のひとつの切羽詰った営みなのかもしれない。

最後に、終始編集作業に協力していただいた教務補佐の古川高子、山崎信一、藤井欣子、割田聖史の各氏にお礼申し上げます。

(海外事情研究所所長 藤田 進)





## 編 集 規 定

1. 『Quadrante クアドランテ』は、東京外国語大学海外事情研究所の研究活動の成果を発表するために、同研究所の責任において編集・発行される。
2. 『Quadrante クアドランテ』は、原則として各年度ごとに1号を発刊する。
3. 海外事情研究所は、『Quadrante クアドランテ』の発行のために編集委員会を置く。編集委員会は所長、所長代理、編集幹事および若干の所員より構成される。
4. 編集委員会は、同研究所の所員ならびに研究所の研究活動に積極的に参画した者、および必要に応じて外部の者に寄稿を求めることができる。
5. 『Quadrante クアドランテ』に掲載される論文等については、編集委員会の責任において査読者を選定し査読審査をおこなう。
6. その他編集上の細則については、編集委員会が適宜これを定める。

- Quadrante

～クアドランテ [四分儀] ～

地域・文化・位置のための総合雑誌

Areas, Cultures and Positions

No.5

発行：2003年3月31日

編集委員：藤田進 相馬保夫 岩崎稔 江藤光一

権原琢 今井昭夫 瀧生慶一

発行所：東京外国語大学海外事情研究所

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

電話：042-330-5405 Fax：042-330-6406

～ 寄 稿 用 紙 送 付 先 ～

印刷・製本：(株)楽巧社

〒112-0002 東京都文京区小石川3-2-14

電話：03-3813-8231 Fax：03-3884-7851